



①脇野沢小学校ドルフィンクラブ 15名。②6年生の柴田くんと北山さん。2人とも脇野沢が大好きだと話してくれた。③カマイルカの群れ。多いときは、100頭を超える群れと出会える。④子どもたちが製作した壁新聞。「私達が住む場所」「イルカがいた」の言葉が印象的。⑤目の前に現れる野生のカマイルカに大歓声。⑥五十嵐館長からは「脇野沢が野生のイルカをたくさん観察できる、世界的に素晴らしい地域」ということを解りやすく学んだ。

イルカが見られるまちって、
実は知りませんでした
脇野沢小学校ドルフィンクラブ
自分たちのまちが、すばらしい地域であることの再認識

鯛島が目をはく脇野沢の海には、毎年5月から6月に野生のカマイルカの群れが訪れ、観光遊覧船「夢の平成号」でいくイルカウォッチングが好評を得ています。地元の方々からは「昔から漁船のそばに現れるのをよく見たもんだ。」と聞くこの環境が、世界的に珍しいと提唱したむつ市海と森ふれあい体験館の五十嵐健志館長の発案のもと結成されたのが脇野沢小学校ドルフィンクラブ。

子どもたちは、五十嵐館長の授業や実際に海に出るイルカウォッチングに加え、脇野沢村漁協と夢の平成号船長からの情報協力を得て、ふるさとの海にやってくるカマイルカを観察し、脇野沢が世界的に貴重な地域であることを学習しています。

「陸奥湾にイルカがいることを知らなかったの、最初はびっくりしました。間近で観ると、すごくかわいかった。超音波を使って、海中でも会話ができるというのがびっくりしました。」と話してくれたの

は6年生の柴田留くん。同じく6年生の北山咲輝さんは「イルカを間近で観て、みんな『わーっ』って大きな歓声を上げました。自分たちのまちでイルカが観られるって自慢。大人になっても、脇野沢を『イルカのまち』として自慢していきたいです。」と目を輝かせます。

校長の原先生は、「私は今年赴任してきたばかりですが、子どもたちがとてもすごい取り組みをしているなというのが第一印象でした。むつ下北のような都会から離れた地域には、自己肯定感が少ないと思うんです。『地元で自慢がない』というような感覚がどうしてもついてまわる。でも、こういう学習をすることで『私たちのまちってすごいんだ』となってくれば良いし、それをどんどん発信できる子どもたちになって欲しいと思います。」と、子どもたちの学習意欲に目を見張ります。

自分たちが住むまちがすばらしい地域なんだと知ることが、ふるさとへの愛につながります。



平成29年度在校生がNPO法人シェルフォレスト川内の監修のもと協力して製作したパンフレット。夢の平成号船内に設置され、イルカウォッチングに訪れた多くのお客様に喜ばれた。

特集 つなぐ 脇野沢



8月17日、脇野沢八幡宮例大祭の最終日。通り過ぎてしまえば夏が終わる鳥居を、神輿はなかなかくぐりません。

年に一度、遠くで暮らすたくさんの家族がこのまちに戻ってくる夏。普段は静かな夜のこのまちも、祭りの夜は燃え上がりします。

もしかしたら、昔から「祭り」はそのまちが今年も元気だという証としても存在してきたのかもしれない。

「来年もみんな笑顔で再会しよう。祭り、するべ。」

このまちを未来につなぐ。それは、みんなの願いです。

むつ市脇野沢
人口：1,513人 平成30年9月1日現在
(男701人 女812人)
タラ、焼き干しをはじめとした漁業を主産業とし、鯛島や野生のカマイルカなど、風光明媚な自然を活かした観光資源にあふれるまち

下北駅から車でおよそ1時間。本州最北のむつ下北においても、道を先へ先へと進んだ地にあるまち、脇野沢。

30年前には3000人を超える人口があったこのまちも、現在は1500人に減少しました。さまざまな方にお話を聞いても「脇野沢には若い者はほとんどいない」と言います。実際、中学高校を卒業すれば市外県外に出て行く若者のほうが多いのも事実。

しかし、このまちを「ふるさと」といっても心の片隅に置いて都会で頑張っているひとや、そんなひとたちが帰ってくるこのまちを守り抜いているひと、何より、脇野沢に生まれ未来を担っていく子どもたちがいるのも事実です。

近いうちに、たくさんの人で賑わうようになるところではないかもしれませんが。でも、なくてはならないまち脇野沢。

今月の広報むつは、脇野沢を支え、頑張っている方々をご紹介します。